

2. アテンションミスはなぜ起こる？

ワーキングメモリとアテンション

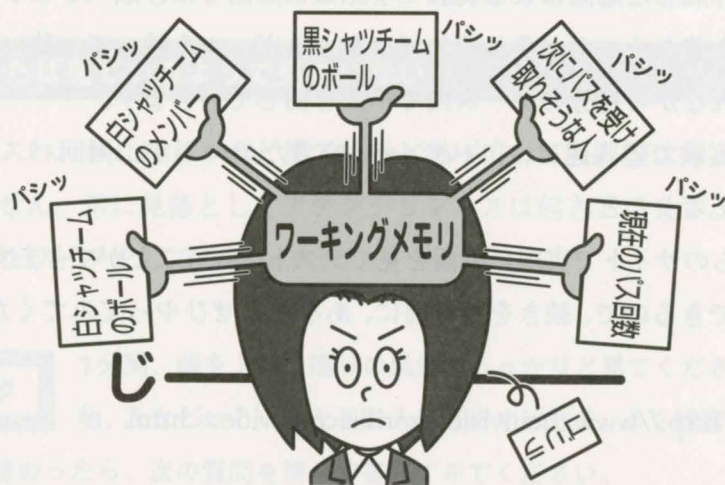
さて、「選択的注意」テストはいかがでしたか？

やってみればわかりますが、実験の課題はその人の注意を一つのことに集中させるもので、それによって多くの人が画面に大きく現れるものを見落としてしまうのです。あなたはこの動画に登場した「ゴリラの着ぐるみ」に気がついたでしょうか？

第1章のワーキングメモリの仕組みで解説したように、ワーキングメモリは「アテンション（注意）」という、いわば「腕」によって、新しく入ってきた情報をつかんで「覚えた！」という状態をつくっています。

そしてこの「腕」の数、注意の数が限られているため、同時に注意を向けたり、記憶したりできる情報には限りがあるのです。

先ほどのパスを数える実験での、ワーキングメモリの状態がどんなようだったかを示すと、下の図のようになります。



アテンションの数は限られている

まず一本の「腕」、注意は、白いシャツを着ているチームがパスをしている「ボール」に向けられていたでしょう。また、ボールだけでなく、白いシャツを着ているチームの「人」にも向けられていたはずですが。

さらに、黒いシャツを着ているチームのボールや人にも、注意が使われています。「黒いシャツを着ているチームは無視していいのだから、注意は使わないのでは？」と思われるかもしれませんが、しかし、**物事を無視するためにも実は注意が必要**なのです。これは「注意抑制」と呼ばれるのですが、それをしないと、うっかり黒いシャツのチームのパスもカウントしてしまったり、間違えて黒いシャツのチームの人に注意を奪われてしまったりして、白いシャツのチームの動きを捉えられなくなってしまいます。

このように「白いシャツを着ているチームのパスを数える」という極めて単純な課題でも、これだけの注意を使い、多くの人があとから見れば明らかな大きな物を見落としてしまいます。

日常生活、そして仕事でも、これと同じように、何かに気をとられるあまり、とても大事なことを見落としている可能性があるのです。

「わかったつもり」がアテンションミスを引き起こす

また、実は注意を向けるべきところなのに、「わかったつもり」になり、しっかり注意が向けられず「見落とし」が起きてしまうこともあります。

たとえば、先ほどのバスケットボールのパスを数える動画。ゴリラの姿を見落とした人も、少しは目で捉えています。しかし、ゴリラは「黒い」ので、無意識のうちに「これは黒いシャツを着たチームの人だ」と「わかったつもり」になって、それ以上、注意を向けようとしません。そのため、ゴリラであることに気づかないのです。

このように「わかったつもり」が、アテンションミスの起こる原因になっているのです。

